

人間元素論？

加藤 賢一

私は今、科学館11名の学芸員の代表という役どころである学芸課長職を仰せつかっています。学芸員の方々は仕事内容が少し違って学芸課の業務の進行管理や館全体の仕事などに従事していますから、学芸員というよりマネージャーと言った方が良いかも知れません。しかし、元々はプラネタリウム解説員ですからそんな仕事も嫌ではないのですが、なにせ下手で不器用なものですからとうにお役御免となってしまいました。

さて、プラネタリウム解説員として電気科学館にやってきたのは1974年でしたから、既に30年です。学芸員として何か専門分野を持たなければと思って悶々とあせる日々が何年も続きましたが、ひょんなことから星のスペクトルを扱うようになり、ここしばらくは星の表面にどんな元素がどの位あるかという元素量を求める研究に従事してきました。もっともこうした仕事はもっぱら自宅学習というところですから、趣味と言うべきかも知れませんが。

表1. 人体と宇宙組成比との比較(数量比)

人体	海水	地表面	宇宙
水素	水素	酸素	水素
-----	-----	けい素	ヘリウム
酸素	酸素	水素	酸素
炭素	塩素	アルミニウム	炭素
窒素	ナトリウム	ナトリウム	窒素
カルシウム	マグネシウム	カルシウム	ネオン
リン	イオウ	鉄	マグネシウム

この仕事を通して得たのが「人間元素論」という見方です。これは人間の体を構成している物質は宇宙物質と構成比が良く似ているということから出発します。表1をご覧ください。地表面、海水、人間、宇宙を構成する元素を多い順に並べてみました。生物は海水中で生まれやがて陸地にあがり、進化の末、人間まで辿り着いたということになっています。それらと比べてみると、見てのとおり、人間の体を作っている物質の構成は何と宇宙物質によく似ているではありませんか！ びっくりです。少なくとも私はびっくり、でした。人間は最も遠い故郷である宇宙に酷似していたのです。人間は海水より、地殻よりずっと宇宙的なのです。

この事実から私は生命体を考える上で「人間元素論」とでも名づけるべき見方を抱くようになりました。そう言うと大層に聞こえますが、内容は大したことはありません。

昔、人間機械論という考え方が提唱されたことがあります。デカルトあたりが言い出したようですが、人間の機能はすべて物理的に分析できるし、人間は一種の自動機械だと考える立場で、現代の人間観は基本的にこの考えに立脚していると言えます。心臓や肺や骨などのような人体を構成する器官はそれぞれの役割を持ち、それはまるで機械を構成するパーツに比することができます。このような考えに立てば心臓移植や対外受精などに抵抗感がなくなります。各器官は部品であり、それが機能を果たさなくなれば交換して人体機能を回復させようとするのは自然な発想からです。でも、もし人体には靈魂が宿っており、神の意思で動いているなどと考えていたら、他人の肉体から心臓を取り出して自分に入れようなどという発想は生まれにくいはずで、現代の医療技術は完全にドライな人間機械論に思想的根拠を置いていると言えます。

この人間機械論は個体人間についての見方を提供してくれていますが、誕生以前のことは何も言ってくれません。人間元素論はそれを教えてくれるものと言えます。人間元素論では通常元素（ありふれた宇宙物質）があり、それをどのような割合でどのようにくっつけるかという設計図があって人間はできると考えます。材料と設計図です。設計図とは具体には遺伝情報などであり、その違いによってライオンになったり、人間になったり、男になったり女になったり、果てはオリオン星人になったりすると考えます。この視点から見ると地球などが特別の存在であって、人間は反対にごく普通の宇宙物質の一形態に過ぎず、従って宇宙人はあちこちにおいて、宇宙とともに進化するだろうし、人間存在は自然環境抜きに語れないことが素直に納得できます。人間設計図をビールス遺伝子に組み込んであちこちにばらまけば人間が宇宙のあちこちに・・・というわけでホイルのビールス説などもまことしやかに見えてくるし、クローン人間はこれまで設計図は宇宙から与えられるものと決まっていたのに人為的に作り変えることであるから、人類への挑戦ではなく、宇宙への挑戦とでも言うべきで・・・でも、設計図が誰かと同じと言うだけで生まれた子は普通の人間だし、10歳になった彼女（彼でも）がテレビで「私にはお父さんがいないの。でも私は普通の女の子よ。なのに・・・およよよ・・・」などと泣かれたら全国の皆さんからは同情の嵐だろうし、・・・などと想像が膨らみます。でも、これって、宇宙を見れば人間理解が深まるというような高尚な話でなく、勝手な解釈ができるというだけのことですね。

（かとう けんいち 大阪市立科学館学芸課）